

持つことと失うこと(2)

津守 真

手に持つもの

子どもは学校に行くときに、しばしば何かを手に持ってくる。長い期間にわたって同じ物を持つてくることもある。遊んでいる間にどこかに置き忘れてしまって、帰るときに見付からなくて大さわぎすることもある。いつもそれを手に持っているのは、それとかかわりのあることをいつも考えているからだろう。

五歳のT夫は、毎朝家から学校に行くときに、小さなバスや電車を両手に持ってくる。ある時期、それを一日中手から放さないことがつづいた。水洗便所でトイレットペーパーを流す遊びをしていたときもそれを手に持っていた。次第に熱中してくると、それを棚に置いたりしたが、立ち去るときには忘れずに持っていた。そのために活動が制約される

ように思えて、母親はそれを放させようと試みたこともあった。しかしT夫は足で地面を踏み、声を立ててそれを持つことを要求した。このようなとき、私はそれは子どもが気持ちのよりどころにしている物だから、自分から手放す気が起こるまで持たせるようにしてきた。これまでも、ある子どもはひもを、ある子どもは小さなボールを手から離さなかつた。そして手からはなすようになる頃には、私もそれがその子の内的生活にとつた大事な物であることが分かるようになっていた。T夫の場合もそうであることを疑わなかつた。

あるとき、私はT夫と一緒に外に出た。T夫はまっすぐに地下鉄の改札口に行き、ホームに電車が来たりいったりするのを長い時間見ていた。電車が一台発車してしばらくすると向かい側の電車がホームに止まり、また去る。一台去ってもまた次の電車がくる。上りのホームに電車が来ては去るのを見ていのはあきなことだった。それを見ているうちに気付いたことは、来た電車が去っても次の電車があらわれて、失われたものが再び得られるというテーマがここにあることだった。T夫がこうして二時間も電車を見て過ごすのは、この疑問を考えているのではないかと思われた。T夫がいつも両手にバスや電車を持って登校するのは、このテーマを考えつづけているからではないかと考えた。前回に述べたように、もしも私の推論が間違っていないければ、この子どもは、母親喪失の体験——一度立ち去った母親が再びあらわれるかという疑問——を探っていた。それをトイレットペーパーが排水口の奥に消えてゆくのを確認する遊びに表現していた。これらの遊

びの意味を発見することは、この特定の子どもの生活が展開するために欠くことができないのであって、この子どもにも独自の意味である。同じ行為であっても、別の子どもには別の意味がある。

個人的意味と普遍的意思

九月末のある朝、T夫はいつものように両手にバスと電車をもって登校し、流して容器に水を入れては流すことをくり返していた。私の傍で一緒に見ていた母親が突然言った。

「わたし考えたんですけど」

私 「何を考えたの？」

「この子がトイレトベーパーを流すのも、循環なんです。電車をみるのも、同じ電車がくるわけじゃないけど、いってもまたくるんです。」

私はT夫の母親がこう話すのを驚いて聞いていた。私だけでなく母親も同様に考えている。

この遊びの中に、失われたものが再び得られるかというT夫の疑問がかくされているのを母親も気が付いていた。そして更にこの母親は、循環という普遍的認識にまでひろげようとしている。

ひとつの行為の意味を考えるのに、行為者の生活に内面的に参与し、その子どもの生活を展開しつつ、その動力となっている意味を発見しようとするのが、保育における方法で

ある。その過程において、ひとつの行為をとり出して、それを他者にも起こりうる行為と考へ、他者のひとりである自分をも含めて、その意味を探る試みをする。そのとき、特定の子どもにとつての意味は、他の人に対してもひろげられ、普遍の意味となる。保育の思考にはこの両者が含まれる。

この母親が循環と言ったとき、排泄物が大地にもどり、作物を実らせて食物となり再び排泄されるというように、ひと度失われたものが違った形で再びもどってくるという自然の循環作用を指していたのだと思う。この子どもは、これらの行為を通して、循環という普遍的認識をもしていると言えるだろう。私がこの行為の意味を考えていたのと同時に、母親もこのことを考えていた。そしてT夫自身もこのことを考えたのだろうと思う。ひとつの行為は、個人的意味をもつと共に普遍の意味をもっているのだと思う。

二か月以上たったいま、T夫は長い間手に持っていた電車やバスを、もはや手に持っていない。それをもつことの意味が認識されたとき、自分からそれを手放せるようになった。ただし、夜ねるとき、自分のふとんの中に電車とバスを一杯いれてねるといふ。

持つものを手放せるようになったとき、T夫は自分から外界に関心をもち、いろいろの人と遊ぶようになった。日に一度は電車やバスを見に学校から外出しないではいられなかったのに、一日中学校の中で過ごし、自分から遊ぶことを見つけている。保育者の側からいうならば、それまで極度に神経を使って接しなければならなかったが、そういう心配

はいらなくなつた。

この子どもは、自分らしく生きられるようになったのだと思う。

獲得すること——持つこと——失うこと——あること

獲得することは自分の領域がひろがることであるが、それには困難や努力が伴う。ひとたび獲得したものは、「もつ」ことになり、それを手放し失うのには、新たな努力を要する。自分が獲得したものは、手放すときにも主体としての自分があるから、手放すことも比較的容易である。しかし自分が獲得したのではなく、運命的に持つものは手放す（失う）ことは容易でない。それを失っても「ある」自分を発見しなければならぬ。幼い子どもにとって母親は最初から自分の一部であつて、それを手放すことができるようになるのには長い過程を必要とする。

成人して後にも、人は各時期に「もつ」のが当然と思つていたものを失う危機に直面する。そのときに、それを失うことにより、本来の自分を発見して生きる機会が与えられている。つまり、「もつ」ことから「ある」ことへの転換の時である。

青年期には、人は獲得することによって自分が強められることへの情熱と喜びを経験する。成人期には、他人のために獲得し戦う。そして次第に人は失うことによつて、「ある」ことよるこびを知る。その「ある」ことは、成人してはじめて知るのではなく、幼年期から体験されている。物を手に持つことを知らない乳児の初期に、子どもは自分が存

在することの快さを、周囲の人々との平和な生活の中で体感している。幼児期に、子どもは何か執着しなければいけない葛藤から解放されて、自分で遊べるようになる。すなわち、「もつ」ことから解放されて、自分が「ある」ことを体験する。人間の生涯の中で、人はいろいろのものを獲得し、持ち、失い、自分自身としていまを生きる（ある）ことへと立ちもどる。「もつ」ことの価値が過大に重視される文化の中で人間が成長することの困難さをあらためて考えさせられる。

（愛育養護学校）

